

懸垂分詞の存在理由をめぐって

——談話分析の観点から——

<On the Raison D'être of Dangling Participle>

山 岡 實

はじめに

本稿は、これまで分詞句と主節の統語論的・意味論的關係に基づいて正しい用法ではないと非難されてきた懸垂分詞 (dangling participle) を、その談話 (discourse) における機能と表現効果という観点から再考し、その存在理由を正当化しようとするものである。

第一節では、懸垂分詞が、なぜ、これまで正しくない用法だとして非難されてきたか、その理由を概観する。第二節では、物語的談話における懸垂分詞の談話機能と表現効果がどのようなものであるかを考察し、さらに、その結果に基づいて懸垂分詞の存在理由を正当化してみる。第三節では、説明的談話における懸垂分詞の談話機能と表現効果を考察し、それらが、基本的には、物語的談話の場合と同じであるということを示す。最後に、第四節では、まとめを行う。

1 懸垂分詞の容認性について

新英語学辞典 (1982) によれば、懸垂分詞とは、分詞構文において意味上の主語が主文の主語と異なるのに主語を表現していない分詞 (句) をいう¹⁾。たとえば、次の(1)の下線部分、

(1) Having walked two miles, the cabin was a welcome sight.

がそうである。この懸垂分詞は、実際には広く用いられてきたにもかかわらず、伝統文法家によって loose participle, misrelated participle, unattached participle などと様々な非難の意味を伴う名称で呼ばれてきた²⁾ ことから推察できるように、一部の慣用化されたものを除いて正しくない用法だと見なされてきた³⁾。その非難されてきた根本的理由は、分詞句の省略された主語と主節の主語が異なっているために、つまり、明示的な主語のない分詞句は、主節の主語と同じ主語をもっているものと理解される、という一般的規則に違反しているために、分

懸垂分詞の存在理由をめぐって

詞句によって示されている動作・状態が主節の主語以外の誰の動作・状態であるのか不明瞭である、という一点に集約できる。

この伝統的態度は、現代の文法家たちの間にも脈々と受け継がれている。Quirk et al.(1985)と Swan (1980) がその典型である。両文法家の見解を原文をまじえてみておこう。

Quirk et al. (1985 : 1121-1122)

It is considered to be an error when the understood subject of the clause is not identifiable with the subject of the matrix clause, and perhaps does not appear in the sentence at all :

- (2) ?Driving to Chicago that night, a sudden thought struck me.
- (3) ?Walking down the boardwalk, a tall building came into view.

In these examples the implied subject of the clauses is presumably *I*, but *I* does not occur as the subject of the matrix clauses.

したがって、主節に“*I*”を導入した次の文は容認可能となる。

- (2)' Driving to Chicago that night, I was struck by a sudden thought.
- (3)' Walking down the boardwalk, I saw a tall building.

Swan (1980 : 455)

It is usually considered a mistake to make sentences like these in which the subjects are different.

- (4) *Looking out of the window of our hotel room, there were lots of mountains.

ここで彼らの指摘している容認性の度合いの基準は、(2)'・(3)'のように分詞句の省略された主語と主節の主語が同じものであれば、文句なく100%容認され、後は、主節に分詞句の意味上の主語を推定させるものがあるかどうかによって異なってくるということになる。つまり、(2)・(3)のような場合、主節から分詞句の意味上の主語として“*I*”が推定できるので、容認度が低いという程度であるが、(4)および次の事例(5)のような場合、

- (5) *Reading the evening paper, a dog started barking.

主節に分詞句の意味上の主語を推定させるものが全くないので、容認不可能な文になる、ということである。しかしながら、(4)・(5)と同じように主節に分詞句の意味上の主語を推定させるものを見いだすことのできない次のような事例が、しばしば、実際の物語とか論文の中に現れる。

- (6) Going up the road toward home the road was smooth and slippery for a while.
(Hemingway: 232)
- (7) Here, looking up, it is a refuge. (Guest: 14)
- (8) Comparing these sentences, two facts are obvious. (Searle: 74)
- (9) Taking a broader perspective, the analysis seems to point up the pertinence of case frames for lexical entries. (Crockett: 299)

それでは、これらの懸垂分詞の存在理由をどのように説明すればよいのであろうか。これまでは、分詞句と主節の統語論的・意味論的關係だけを考察対象とし諸家の見解をみてきたが、ここで視点をかえて、懸垂分詞の実際に生起している談話を考慮に入れて考察を進めていくことにする。

以下では、懸垂分詞が、まず、典型的に現れるのは、物語的談話であることに着目し、その談話の中でどのような機能を果たし、また、どのような表現効果をあげているかを検討していく。

2 物語的談話における懸垂分詞

物語的談話に現れる言語形式の機能分析を行っていく場合、視点の問題を取り入れた認識論的観点——当該の言語形式によって表されている事態が、誰の視点から見たものであるかということ——が重要な分析上の核となる⁴⁾。懸垂分詞が物語的談話に生起している場合も、その例外ではない。

それでは、具体的な事例に即して、一人称小説の場合と三人称小説の場合との懸垂分詞の機能的特性を、視点の問題を考慮に入れることによって検討していく。

2.1 一人称小説の場合

一人称小説の場合、語り手としての“*I*”と SELF（意識の主体）としての“*I*”⁵⁾の視点が支配する場面から成り立っているが、この懸垂分詞が現れる問題の場面では、常に SELF と

懸垂分詞の存在理由をめぐって

しての “I” からの視線が向けられている (あるいは SELF としての “I” の意識が支配している)。

具体例を見てみよう。

- (10) We looked back at the inn with light coming from the windows... Going up the road toward home the road was smooth and slippery for a while... (Hemingway: 232)
- (11) As I got out of the van, thunder rumbled overhead, a strange, menacing sound and the sky went very dark, so that standing there in the clearing amongst the trees, it seemed as if the day was drawing to a close and darkness was about to fall. (Higgins: 104)
- (12) I could not tell if he had ever heard of me. The hand he gave me was cold. His face was quite incurious... “Where are those awful policeman?” demanded Miss de Haviland... “Where is he now?” “I’ve no idea, Aunt Edith. Upstairs, I suppose.” “With Brenda?” “I really don’t know.” Looking at Philip Leonides, it seemed quite impossible that a murder could have been committed anywhere in his vicinity. (Christie: 28)

いずれも, SELF としての “I” の視点が支配する場面である。(10)の懸垂分詞は, SELF としての “I” の家に向かって道を上っている意識を反映していて, 主節では, その上っている時のその道についてのコメントが述べられている。(11)の場合, 懸垂分詞には, SELF としての “I” の木々の間の空地に立っている意識が感じられ, 主節では, その立っている時の辺りの様子についての印象が示されている。(12)では, 懸垂分詞は, SELF としての “I” の Philip Leonides をじっと見つめている意識を反映していて, 主節では, その見つめている時に抱いた殺人についての印象が述べられている。

2.2 三人称小説の場合

三人称小説の場合, ある特定の登場人物の視点 (あるいは意識) が問題の場面を支配している。

具体例を見てみよう。

- (13) Facing the house, he stares up at his bedroom window. In the early morning, the room is his enemy; there is danger in just being awake: Here, looking up, it is a refuge. He imagines himself safely inside; in bed, with the covers pul-

led up. (Guest: 14)⁶⁾

(13)は、登場人物 he (Conrad) の視点が支配する場面である。Conrad は、玄関の階段に座り、友人の Lazenby が車で迎えにくるのを待っている。その間に自分の寝室の方に目をやり、寝室についての思いに耽っていく。早朝の寝室は、敵だ。が、この玄関の階段の所から (here)、寝室を見上げていると (looking up)、避難場所だとも言える、と感想をもらす。このように、懸垂分詞 (looking up) には、登場人物 Conrad の寝室を見上げている意識が感知でき、主節 (it is a refuge) では、その見上げている時に感じた寝室についての印象が述べられているのがわかる。

(14) He left the office and swayed along through the hallways of Wheat King. Turning a corner, an unexpected mirror greeted him, with an image of himself in the green-and-white polyester suit. (Kotzwinkle: 116)

(14)は、登場人物 he (Gus) の視点が支配する場面である。Gus は、事務所を出て Wheat King の廊下をふらふらしながら通っていく。その廊下のあるコーナーを曲がると、思いがけずも鏡が目に入ってきた。その鏡には、ポリエステルのスーツを着た自分の姿が写っている、という脈絡である。第一文では、語り手の目から見た Gus の行動が描かれている。そして、懸垂分詞 (Turning a corner) では、登場人物 Gus の廊下のコーナーを曲がっている意識が、主節では、その時 Gus の目に鏡が目に入ってきたという知覚内容が描かれている。

(15) He felt himself gently touched on the shoulder; and looking round, his father stood before him. (Jespersen: 94)

(15)も登場人物 he の視点が支配する場面である。事例(13)と同じように、懸垂分詞には、he の辺りをぐるっと見回している意識が感知でき、主節では、その時 he の目に入った事態が描かれている、と言えよう。

2.3 懸垂分詞の機能的特性と表現効果

ここで、物語的談話に生起する懸垂分詞の機能をまとめ、さらに、その表現効果について考えてみよう。

懸垂分詞は、小説のタイプに関係なく、当事者 (SELF としての “I” あるいは登場人物) 自身に対する意識、すなわち、当事者の

懸垂分詞の存在理由をめぐって

- (1) ある対象を知覚している意識
- (2) ある行為を体験している意識
- (3) ある状態にいる意識

を反映している。

さらに、一般化した形で言うと、次のようになる。

懸垂分詞の機能は、意識の主体 (SELF) が過去のある時点 (Now-in-the-Past) においてある出来事を体験している意識を反映することにある

この談話機能は、拙稿 (1984) で論じた「時」・「理由」の用法の分詞構文の談話機能とまさに同じものであり、懸垂分詞は、分詞構文の一つの下位タイプとして、「時」・「理由」の用法の分詞構文と同一の機能を果たしていると言えよう。そうすると、懸垂分詞の表現効果も、「時」・「理由」の用法の分詞構文と同様、次のように規定することができる⁷⁾。懸垂分詞が示す事態は、作者が、ある過去の体験を単に過去の出来事として客観的に描いたものではなく、意識の主体の意識を通して今まさに体験しているものとして描いたものである。したがって、作者の意図する表現効果は、

懸垂分詞を用いることによって、われわれ読者の眼前に、今まさに体験している意識の主体の内側から見た内面的事態を展開し、読者にまるで意識の主体と共に出来事を体験しているかのように思わせて、その意識の主体の内面にわれわれ読者を引き込んでいくことにある

ということになる。

2.4 懸垂分詞の存在理由の正当性

一般的に、懸垂分詞を Xing で、主節を Y で表すと、Xing, Y 構文全体は、意識の主体の目から見た (あるいは意識が支配している) 同時に存在する二つの事態を表していることになる。つまり、すでに見てきたように、Xing は、意識の主体がある出来事を体験している意識を表し、Y は、その出来事を体験している時に感じたその意識の主体の印象・コメントあるいは知覚内容を表しているからである。

このように考えてくると、すでに懸垂分詞の存在理由が正当化されたのも同然である。なぜなら、これまで様々な文法家によって非難されてきた点、つまり、分詞句と主節の主語が異なっているために、分詞句によって表される事態が誰のものか不明瞭であるという点は、分詞句が意識の主体の目から見た同時に存在する二つの事態の一方を表しているという観察によっ

て解消されたからである。Xing, Y 構文が現れる問題の場面には、常に意識の主体が遍在している⁹⁾ので、一見、分詞句と主節によって示される事態が別々の異なった人物の事態を示すように見えても、両者とも、意識の主体の目から見た事態を示すことになるのである。したがって、第二節で容認性の度合いが低いとされた(2)と(3)の文、また、容認不可能とされた(4)と(5)の文は、物語的談話の然かるべき文脈では、何ら不自然さのない容認可能な文となるであろう。一般的に、このようなタイプの懸垂分詞も、物語的談話に生起し、分詞句と主節の間に意味的な矛盾がない限り、容認可能な文になるものと考えられる。

以上のように、これまで統語論的・意味論的観点からその存在を脅かされてきた懸垂分詞も、機能的観点から見直すと、それ以外の(分詞句と主節の主語が同一である標準的とされてきた)分詞構文と同じ談話機能を果たし、同じ表現効果をあげていて、同じ分詞構文として同一の範ちゅうに属していることがわかった。したがって、懸垂分詞だけ非難されるいわれは全くなく、当然のことながら、他の分詞構文と同じように、懸垂分詞の存在も十分に認められて然かるべきである、と言えよう。

3 説明的談話における懸垂分詞

すでに、前節でその存在理由が正当化された懸垂分詞は、次のような言語学に関する論文などの説明的談話⁹⁾にも、しばしば、見出すことができる。

- (16) Comparing these sentences, two facts are obvious. (Searle: 74)
- (17) Taking a broader perspective, the analysis seems to point up the pertinence of case frames for lexical entries. (Crockett: 299)
- (18) Assuming that middles are underlyingly transitive and assuming a syntactic movement of the object NP into an empty subject position, the remaining t blocks the intransitive adverb *away*. (Keyser & Roeper: 393)
- (19) Turning now to external perspective, its basic characteristic is avoidance of any account of the thoughts or feelings of characters, or at least avoidance of any claim to the fidelity of such an account. (Fowler: 141)
- (20) Classifying the relative clauses in the pear stories on the basis of this distinction, the spoken and written narratives reveal the differences shown in Table 15. (Beaman: 73)

このような説明的談話の場合、懸垂分詞は、どのような機能を果たし、どのような表現効果をあげているのであろうか。

懸垂分詞の存在理由をめぐって

以下では、この問題を、Thompson (1983) と前節で論じた物語的談話における懸垂分詞の機能的特性を参考にして検討していくことにする。

Thompson (1983) では、説明的談話の懸垂分詞を *speech-act absolutes* と呼び¹⁰⁾、次のような例文をあげている。

- (21) Supposing that such automatic responses do exist, ..., it has not been definitely shown that they are differentiated as between types of affective experience.

分詞句 (*supposing...*) の省略された主語は、*"We"* which includes the writer and the reader, つまり、inclusive *"we"* であるという。この inclusive *"we"* というのは、次の例文 (Leech & Svartvik: 57) に典型的に見られるように、

- (22) We noticed earlier, on page 200, that ...
(23) Let us now turn to another topic ...

読者を含む *We* で、読者と行動を共にしていることを示す¹¹⁾。

この懸垂分詞の省略された主語は、inclusive *"we"* であるという観点を取り入れ、事例(16)–(20)について考えてみよう。まず、この場合、懸垂分詞は、事例(19)に典型的に見られるように、*Now*, つまり、議論を行っている今の時点で、「外的に視点を向けると(19)」とか「これらの文を比較すると(16)」とか「より広い視点を取ると(17)」などのように、ある事柄を体験している意識を表しているといえることができる。

この懸垂分詞の機能は、次のような節を用いた表現と対比させると、一層明確になる。

- (24) If we assume that the lack of abundant identificatory information... provides increased complexity, then the written narratives can be considered more complex on this measure. (Beaman: 74)
(25) If we choose adjective rather than adverb incorporation, the results are the same. (Keyser & Roeper: 387)

このように、*if* 節を用いた表現は、著者の二つの事態についての論理的関係の説明として提示されたものであり、*if* 節それ自体は、帰結を示す主節に対する条件を表し、懸垂分詞のように著者のある事柄を体験している意識には関係していないのである。

さらに、ここで inclusive *"we"* の特性を併せ考えると、この懸垂分詞は、議論を行っているある時点において、ある行為を読者と共に体験している意識を示しているということにな

懸垂分詞の存在理由をめぐる

る。たとえば、事例⑩は、「今これらの文を比較してみると、つまり、あなたがた読者と共にこれらの文を比較してみると」というように、著者が読者と行動を共にし一体となっていることを含意している。

以上の考察から、説明的談話の懸垂分詞の機能は、次のように規定することができる。

議論を行っているある時点で、著者がある出来事を体験している意識を表す（ただし、説明的談話の性格上、厳密に言えば、この体験している意識というのは、読者と共に体験している意識ということになる）

そうすると、説明的談話の懸垂分詞の機能というのは、基本的には、物語的談話の場合と同じであり、ただ、談話ジャンルの特性の差異により、意識の主体が著者であるという点、さらに、読者との一体感を重要視するという点が異なると言うことができる¹²⁾。

次に、表現効果について言うと、既述した機能的特性を読者側から見れば、明らかになる。すなわち、著者がある出来事を読者と共に体験しているということは、読者の側から見れば、まさに今著者と共に議論を展開していることである。したがって、この懸垂分詞の表現効果は、

読者に著者と共に議論を展開させているように思わせ、読者を議論の中に引き込むことである

と言えよう¹³⁾。

4 ま と め

以上のように、談話の概念を考慮に入れた機能的分析から懸垂分詞を再考した場合、懸垂分詞は、その生起する談話のジャンル（物語的談話と説明的談話）にかかわらず、意識の主体がある出来事を体験している意識を反映するという談話機能を果たし、さらに、読者をそのテキスト（物語および論文）の中に引き込むという表現効果をあげていることがわかった。したがって、これまで懸垂分詞に対して行われてきた非難は、生起している談話を無視して一文内の統語論的・意味論的特性にのみ目を向けてきた分析態度に起因しており、本稿のような立場を取れば、その非難は全く当たらないことになる。懸垂分詞は、決して、これまで評価されてきたような否定的存在ではなく、表現上、正当な存在理由をもつ重要な表現形式であると言える。

注

- 1) 荒木一雄他編：『新英語学辞典』（1982）研究社刊，p. 238を参照。
- 2) 他に，*hanging participle*, *unrelated participle*, *wrongly attached participle*, *isolated participle* と呼ばれる場合がある。
- 3) 懸垂分詞は、「ほとんどすべての学校文法の教科書で誤りとされている」とか「われわれ外国人にとってはなるべくならこれをさけるという態度が安全である」とさえ言われる場合もある〔新英文法辞典（1968：290-291）〕。また，一方では，分詞句の意味上の主語として総称人称の *one* を補うことのできる *judging by*, *judging from*, *considering*, *strictly speaking*, *generally speaking* などとか，慣用的に *I* を表さない *talking of*, *speaking of* は，その使用が慣用的に確立していた，とされている〔新英語学辞典（1982：283），新英文法辞典（1968：290）〕。
- 4) 拙稿（1982）・（1984）・（1985）は，この認識論的観点に基づいて，「進行形」，「Xing, Y 構文」および「X, Ying 構文」の *Ing* 形式の機能的特性を考察したものである。
- 5) 一人称小説の“*I*”の二つの機能——語り手としての“*I*”と *SELF* としての“*I*”——は，Banfield（1982）で用いられているものである。なお，本稿で問題となる *SELF* としての“*I*”は，一般的には，「目撃者としての“*I*”」とか「登場人物の“*I*”」と呼ばれているもので，出来事を体験する“*I*”のことである。
- 6) この物語は，*present tense story* なので，時制がすべて現在時制になっていることに注意。
- 7) 拙稿（1984：131）を参照。
- 8) Leech et al.（1982：181）では，このような意識の主体を *implied Agent or 'doer'* と呼んでいる。
- 9) 他に，科学・哲学に関する論文，新聞・雑誌の記事，エッセイ等の説明的談話も考察対象になるが，本稿では，言語学に関する論文を対象を絞った。他の説明的談話の考察結果については，別の機会に譲りたい。
- 10) Thompson（1983：54）を参照。
- 11) 行動を共にするということは，②の場合なら，「以前に，200ページで…であることに，我々は共に気づいた，つまり，私も気づいたし，その時，一緒にあなたも気づいたであろう」ということを意味する。尚，Halliday（1985：347）も参照。
- 12) 説明的談話というのは，著者が，読者に，ある主題を提示し，それを論理的順序に従って可能な限り理解しやすいように整理して説明し，その論点を納得させることを目的とする談話である。このような談話の特性からして，著者の意識がテキスト全体を支配し，読者との直接的な接触が重じられるのである。
- 13) 尚，説明的談話に現れる，次のような分詞句と主節の主語が同一の分詞構文も，ここで論じた懸垂分詞と同じ談話機能と表現効果をもつものと言える。
 - i) Summarizing, then, we have the following general picture. (Chomsky: 25)
 - ii) Turning now to the preposition and adjective classes, we again find clear differences at the centres. (Huddleston: 347)
 - iii) Moving from deictic to interpersonal features, we notice that as might be expected there is a high density of personal pronouns. (Fowler: 95)

参 考 文 献

- Araki, K. et al. 1982. 『新英語学辞典』研究社。
- Banfield, A. 1982. *Unspeaking sentences: narration and representation in the language of fiction*. Routledge & Kegan Paul.
- Booth, W. C. 1961. *The rhetoric of fiction*. The University of Chicago Press.
- Curme, G. O. 1931. *Syntax*. Maruzen.
- Halliday, M. A. K. 1985. *An introduction to functional grammar*. Edward Arnold.
- Huddleston, R. 1984. *Introduction to the grammar of English*. Cambridge University Press.
- Jespersen, O. 1974. *Essentials of English Grammar*. George Allen & Unwin.
- Leech, G., M. Deuchar and R. Hoogenraad. 1982. *English grammar for today*. Macmillan Press.
- Leech, G. and J. Svartvik. 1975. *A communicative grammar of English*. Longman.
- Longacre, R. E. 1983. *The grammar of discourse*. Plenum Press.
- Otsuka, T. (ed.) 1968. 『新英文法辞典』三省堂。
- Quirk, R. et al. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. Longman.
- Swan, M. 1980. *Practical English usage*. Oxford University Press.
- Thompson, S. A. 1983. "Grammar and discourse: the English detached participial clause." In F. Klein-Andreu (ed.) *Discourse perspectives on syntax*, 43-65. Academic Press.
- Yamaoka, M. 1982. 「Stative Progressive の機能的側面についての一考察」『Queries』19, 9-24.
- . 1984. 「分詞構文における Ing 形式の機能的特性とその談話機能」『Queries』21, 23-36.
- . 1985. 「X, Ying 構文における Ying 形式の談話機能と表現効果について」『相愛大学研究論集』1, 119-136。

例 文 の 出 典

- | | |
|-----------------|---|
| Beaman | Beaman, K. "Coordination and Subordination Revisited." 1984. In D. Tannen (ed.) <i>Coherence in Spoken and Written Discourse</i> . Ablex. |
| Chomsky | Chomsky, N. <i>Knowledge of Language</i> . 1986. Praeger. |
| Christie | Christie, A. <i>Crooked House</i> . 1980. Fontana. |
| Fowler | Fowler, R. <i>Linguistic Criticism</i> . 1986. Oxford University Press. |
| Guest | Guest, J. <i>Ordinary People</i> . 1976. Ballantine. |
| Crockett | Crockett, D. B. "Shame, resentment, envy, and pity— a semantic analysis." <i>Lingua</i> 47. 1979. |
| Hemingway | Hemingway, E. <i>A Farewell to Arms</i> . 1968. Penguin. |
| Higgins | Higgins, J. <i>The Savage Day</i> . 1981. Pan. |
| Huddleston | Huddleston, R. <i>Introduction to the Grammar of English</i> . 1984. Cambridge University Press. |
| Jespersen | Jespersen, O. <i>Essentials of English Grammar</i> . 1974. George Allen & Unwin. |
| Keyser & Roeser | Keyser, J. S. and T. Roeser. "On the Middle and Ergative Constructions in English." <i>Linguistic Inquiry</i> 15. 1984. |
| Kotzwinkle | Kotzwinkle, W. <i>Superman III</i> . 1983. Warner. |
| Searle | Searle, J. R. <i>Speech Acts</i> . 1976. Cambridge University Press. |